オーディオ実験室収載

EMT981 再生系の再構成(11)
－ハイドンを聴く(2)－

１．はじめに

前報(3)において EMT981 から TruPhase を経て 300B アンプまでのバランス伝送が実現した機会に、手持ちの CD を聴き直していくことにしました。今回も、しばらく聴いていないハイドンの作品を聴いていきます。

２．EMT981 の試聴方法

EMT981 の再生では、前報(7)と同様に前報(2)の再生ルートとします。

EMT981(＊)→TruPhase→.300B

＊：GPS-777 より CCD-6 経由でクロック入力

古い録音で定位などに違和感が感じられるときは TruPhase で位相を反転します。

再生する CD はハイドンのチェロ協奏曲です。

EMI　TOCE-13293

ハイドン　チェロ協奏曲 1 番ハ長調

チェロ協奏曲 2 番ニ長調

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ（チェロ）

アカデミー室内管弦楽団

OEHMS　OC782

ハイドン　チェロ協奏曲 1 番ハ長調

チェロ協奏曲 2 番ニ長調

ヴァイオリン協奏曲 4 番

ウェン・シン・ヤン（チェロ）

Georg Egger 指揮 Accademia d'Archi Bolzano

３．EMT981 の試聴結果

ロストロポーヴィチ盤のチェロ協奏曲 1 番と 2 番は、ロストロポーヴィチの自在で、闊達なボウイングの演奏が聴けます。1975 年の録音の廉価盤ということで、ディテールの再現は少し甘いところがあり、位相反転させると定位が改善されます。ウェン・シン・ヤン盤のチェロ協奏曲 1 番と 2 番は、2010 年録音のものでチェロもバックのアンサンブルも、自然で強調感のない音です。ヴァイオリン協奏曲 4 番は、チェロへの編曲の演奏で、これも柔らかいチェロの響きが魅力的です。なお、これらすべての曲のカデンツァはウェン・シン・ヤンのオリジナルとのことです。

４．まとめ

クロック入力した EMT981 からのバランス接続の効果で、録音年代や演奏スタイルの違いも分かりやすく、二つの盤ともディジタル臭さを感じない艶やかな音が楽しめます。

以上